

今回われわれは、不安定狭心症例に対し安静時 TI-心筋 SPECT を施行し初期像とともに遅延像を撮像し、その有用性を検討した。方法は抗狭心症薬投与下安静時に塩化 TI 2-4 mCi を静注し、5分後より初期像を、ついで3時間後に遅延像を作製した。さらに Bull's eye 法を用い虚血領域の washout rate (W-R) を算出した。対象は不安定狭心症(増悪労作型)19例で、正常例5例を対照とした。視覚的に再分布(RD)の認められた10例(RD ⊕群)では、RDの認められなかった9例(RD ⊖群)に比して、左室全周の mean W-R ならびに虚血部の W-R は有意に低値を示した。安静時 TI-心筋 SPECT の遅延像は、責任冠動脈推定に有用であることが示唆された。

#### 17. TI-201 運動負荷 SPECT による心筋梗塞症例の viable muscle の評価

——心エコー図との対比——

塚原 玲子	加藤 雅彦	溝部ゆり子
上嶋権兵衛		(東邦大・二内)
細井 宏益	武藤 敏徳	奥住 一雄
河村 康明	山崎 純一	森下 健
		(同・一内)

前壁中隔梗塞22例において中隔の梗塞部 viability を評価するために、TI-201 負荷 SPECT と心エコー図よりの %ΔTh(収縮期壁厚増加率)、IVSE(心室中隔振幅)を計測し比較検討した。加えて ECG 上 QS pattern を呈するものうち ST 上昇群、非上昇群に分けて同様に検討し、以下の結果を得た。① SPECT の視覚分類上、persistent defect 群は他の群に比し %ΔTh, IVSE とも有意に低値であった。② 梗塞領域の %TI uptake と心エコー上の %ΔTh, IVSE との間に有意な相関を得た。③ %ΔTh が

0を示すものでは %TI uptake の高いものほど IVSE がよい傾向があり、かかる症例での viable muscle の可能性を検討する必要がある。④ ECG 上、QS pattern を示すものうち ST 上昇群は8例のうち5例で Bull's eye 法による RD(-)であり、3例で RD(+)であった。ST 非上昇群は全例 RD(+)であった。また、RD(-)でもわずかに hypokineses を呈する症例があり、TI-SPECT においても RDについて再考する必要があると思われた。

#### 18. 冠攣縮性狭心症の診断における過呼吸負荷心筋 SPECT の意義

増岡 健志	鯉坂 隆一	渡辺 重行
杉下 靖郎	伊藤 巖	(筑波大・内)
武田 徹	佐藤 始広	石川 演美
秋貞 雅祥		(同・放)
外山比南子		(東京都老人総合研)

冠攣縮性狭心症(VAP)例に対し過呼吸負荷 <sup>201</sup>Tl 心筋 SPECT (HV-SPECT) を施行し、その有用性を検討した。対象：HV-SPECT を施行した36例で、内訳は VAP 群18例、対照(Cont)群18例である。方法：40分の呼吸を5分間持続させ、心電図および心筋 SPECT を記録撮像し比較した。結果：VAP 群の17例および Cont 群の4例で HV-SPECT 上再分布を認め(感受性94%、特異性78%、正診率86%)、攣縮枝22枝中17枝(77%)で病変の局在を推察し得た。心電図で陽性所見を認めたのは VAP 群の6例のみで、その感受性は33%と不良であった。以上より HV-SPECT は、優れた感受性と局在診断能を有し、とくに心電図変化の乏しい冠攣縮性狭心症の診断に有用と考えられた。